

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想の概要

指定期間	ふりがな	がっこうほうじんひろしまじょがくいん ひろしまじょがくいんちゅうがくこうとうがっこう				②所在都道府県	広島県	
26～30	①学校名	学校法人広島女学院 広島女学院中学高等学校						
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模		
	1年	2年	3年	4年	計	本校は、全校生徒を対象にSGH事業を実施する。対象とする生徒数は④と同じである。		
	中学校	226	232	235	693			
高校普通科	217	219	209	645				
⑥研究開発構想名	「成長目標の共有を通じた生徒・教員協働による高大連携型グローバル人材育成」							
⑦研究開発の概要	教員集団が成長目標を共有すること、大学と連携して生徒が国内外の他者と出会う場を提供することで生徒が成長する。この2つの軸を組み込んだ平和教育をテーマに課題研究を行い、グローバル人材に不可欠な3つの力＝平和観・対話力・リーダーシップを育成する。これを可能にするため、教員の意識を変え組織を改編する。							
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	(1) 目的・目標						
		<p>本構想の目的は「核の惨禍のない世界を創り出す、しなやかな女性」を育成することである。このような人材には「平和観・対話力・リーダーシップ」が必要である。この力をつけるには、中高の教員集団、生徒、連携先の大学が生徒の成長目標を共有すること、実社会で他者と出会うことが不可欠である。この2つを軸とした平和教育を課題研究として行う。この学びを促進させるのが、高大連携である。広島市立大学・平和研究所とは平和教育のカリキュラムを共同開発する。東京医科歯科大学の学生は、対話力を育成するために生徒とICTを活用して議論し合う。広島女学院大学は、リーダーシップを育成する場として生徒にピースセミナーとサマーセミナーを提供する。このような教育を実現するため、教員の意識を向上させるとともに、教員組織を刷新する。平和観は「自主的に留学又は海外研修に行く生徒数」「将来留学したり仕事で国際的に活躍したいと思う生徒の割合」などで計り、現在の約3倍にする。本校が理想とする人材が育成できているかは「SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合」で検証する。対話力は、「卒業時CEFR B1～B2レベルの生徒の割合」「TOEFL iBTの平均点」「論理文章能力検定 レベル1 1合格者」で検証する。リーダーシップは、自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数」「公的機関から表彰、公益性の高い国内外の大会の入賞者数」「Q-Uのアセスメント結果」で検証する。</p>						
		(2) 現状の分析と研究開発の仮説						
		<p>本校は、建学以来英語教育・国際教育・平和学習を長年実施してきたが、生徒が期待しているレベルに達していない現実が顕在化した。生徒の課題は、内向き志向、論理的思考力と主体性の未発達である。これは、海外への進学・留学者数の減少、模試などにおける文章読解問題でのつまずき、ボランティア活動が延べ人数より実人数がずっと少ないことから明らかである。現状を打開するために必要なことは、教員集団の成長目標・効果的な指導方法の共有化と、生徒が実社会で未知なる価値観と出会い、他者にリアリティをもって平和を考える場を与えることである。この2つを軸にした教育により、3つの力の成長が大きく促され、グローバル人材が育成できる。本校は、教員の意識を変え、新たな教員組織へと改編する。既存の海外派遣事業を変え、新たなプログラムを立ち上げる。</p>						
		(3) 成果の普及						
		<p>本校は、年2回のシンポジウム(8月・2月)、教職員を校外派遣しての講演会(年3回)、運営指導委員会の報告公表(HP上、外国語による公開も含む)、生徒・教職員、保護者へのアンケートによって成果を普及する。</p>						

<p>⑧ -2 課題研究</p>	<p>(1) 課題研究内容 中1：ヒロシマ・本校の被爆の状況を取り上げて学ぶ。 中2：海外の人々は原爆をどのように見ているのかを学び、韓国で意見交換する。 中3：「核兵器を廃絶すべきか」を議題としたディベートを行う小論文にまとめる。 ミャンマーのJICA事務所を訪れ平和実践の現場を体験する。 高1：背景の異なる人々とともに平和を創る経験を積む。カンボジア、韓国、東北などを訪れ、問題解決のために協力するにはどうすればよいかを学び実践する。 高2：沖縄基地問題に対し、政策提言を行う。沖縄尚学高等学校を訪問し、高校生に校内選抜されたプレゼンテーションをする。 高3 模擬国連形式で「核兵器を廃絶すべきか」を議論する。それをもとに、平和論文を作成し、英文のサマリーをつけ、核の惨禍がない世界をつくるという決意を固める。 海外研修：モントレイ国際大学院(アメリカ)、NPT再検討会議準備委員会、平和首長会議、国連軍縮会議、首都大学東京・渡邊英徳氏の海外フィールドワークに参加する。 本校が主催のPeace Forum</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 課題研究は、高校は毎週金曜7限、中学校毎週木曜6限の総合学習の時間を用いて、年間を通じて実施。27年度からは1時間増を検討中である。学習効果の検証評価は、課題研究における生徒の成果物を吟味し、生徒への各種アンケートの結果などを連携先の大学とともにフィードバックして行う。</p> <p>(2) 必要となる教育課程の特例等 該当なし</p>
<p>⑧ -3 上記以外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 各学年の課題研究内容と成長目標を教員全体で共有し、教育効果を高める体制を構築する。実施方法は、課題研究の進捗過程に応じて各授業が必要な知識・技能を提供するようカリキュラムを作成して行う。検証は、課題研究につながる各授業の成果物によって行う。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 該当なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 ・海外大学進学支援：説明会を行い、生徒・保護者に情報を提供する。 ・グローバル人材育成のためのシンポジウム：生徒・保護者・地域の方への講演を実施する。 ・外国人留学生とのワークショップ：海外トップ大学の学生が本校に短期留学し、英語の授業や課外活動で生徒の意識を海外に開く。</p> <p>(4) 幹事校としての取組（該当する場合のみ記入） 該当なし</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>本校では高2の選択科目に2時間連続のプレゼンテーション演習の授業があるが、その中で海外から「ヒロシマ」観光に来た人々を対象とした観光案内ビデオを作成する。生徒は出来た作品をプレゼンし、最終的に旅行代理店トップツアーにより審査され、優秀作品を選ぶ。「ヒロシマ」の何をどのように伝えたらよいか、同級生たちと議論を行なう中で、生徒たちはこれまでの平和学習で学んできた「ヒロシマ」とは異なる一面について新たな発見をする。と同時に、「ヒロシマ」に観光に来た人が何を求めているのか、何を見たら喜ぶのかなど相手の立場に立って考えることの重要性に気づくなど、これまでの学びが発揮される授業となっている。</p>

ふりがな	がっこうほうじんひろしまじょがくいん ひろしまじょがくいんちゅうがくこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	学校法人広島女学院 広島女学院中学高等学校		

平成26年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
SGH対象生徒:								400人
a SGH対象生徒以外:	62人	70人	人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: YWCAやJICS(有志による国際協力グループ)が担ってきた活動を、SGH課題研究により一般生徒へ広げる。碑巡りや署名活動など、高校生限定で行ってきた活動を中学へ広げていくことで、既存の活動の参加人数を増加させる。さらに、課題研究によって新たな社会貢献活動のプログラムを立ち上げ、活動の種類も増やしていく。本校がキリスト教学校として重視すべき社会貢献活動への参加人数(実人数)を野心的に設定した。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
SGH対象生徒:								90人
b SGH対象生徒以外:	30人	30人	人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在中3からしか組まれていない海外研修を、中2からプログラム化する。しかも、新たな留学先を設定し、各学年とも複数の国から選択できる内容にする。具体的には、これまでのオーストラリアとアメリカに加え、韓国、台湾、タイ、フィリピン、カンボジア、ミャンマーなど、アジア諸国への海外研修プログラムを設定し、研修先選択の幅を広げる。プログラムの充実を図る一方、教員が意識して生徒に海外研修・留学を勧めること、そして研修に参加した生徒の声により、相乗的に数値が伸びていく雰囲気作りを、SGHとして推進する。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
SGH対象生徒:								80%
c SGH対象生徒以外:	28%	30%	%	%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 本校は現時点ですでにこの数値はかなり高いと思われるが、中学2年から始まる海外研修プログラム、課題研究に結びつけて実施される授業において国際問題を意識的に取りあげ、意識を海外へ向ける。また、中高一貫校である本校の強みを生かし、現在高校で行われている海外からの来校者や留学生との交流の場を中学でも積極的に設定し、多くの生徒グローバルな感覚を日常的なものとしていく。高校では現在JICS(有志による国際協力グループ)や署名実行委員会など一部のグループが中心に参加している国際会議参加などのプログラムを、課題研究と結びつけつつ全校生徒に参加チャンスを与えることで、より広範囲の生徒が国際的に活躍する夢をもつ。さらに、国際会議参加等のプログラムに参加した生徒に、全校生徒へのフィードバックを義務づけることで、より多くの生徒が海外で活躍することを願うようになる。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
SGH対象生徒:								20人
d SGH対象生徒以外:	0人	5人	人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現時点では毎年ではないが、表彰を受ける生徒は出ている。英語の権威ある賞(高円宮杯)など、中学生でも応募可能な英語のコンテストも含め、様々な大会を生徒に積極的に紹介し、応募を奨励する。また、大会入賞者を、校内のアセンブリー(生徒集会)で全校生徒に紹介しその内容を披露する。それにより、「自分もやってみよう」という雰囲気作りを行う。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
SGH対象生徒:								85%
e SGH対象生徒以外:	30%	32%	%	%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 平和観を確立させ、論理的に議論する能力を獲得した生徒は、世界を相手にリーダーシップの発揮を求め、対話手段としての英語力の必要性を痛感する。また、生徒はSGHのプログラムが年々拡大し、活躍する先輩や卒業生の姿を見ることにより、諸先輩以上の活躍を求め、総合的な英語力を習得していく。								
(その他本構想における取組の達成目標) TOEFL iBTのスコア平均点								
SGH対象生徒:								85点
f SGH対象生徒以外:	資料なし	42点						
目標設定の考え方: 本校ではH.25年度よりTOEFL iBTの講座を開講しているが、受講者は15名ほどである。この講座を拡充して参加者を学年の80%にまでもっていく。教員にもTOEFL監督の資格を取得することを奨励し、本校をTOEFL iBT実施会場とし、本校の受験者数を劇的に増やしていく。								

1' 指定4年目以降に検証する成果目標								目標値(33年度)
	24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合								
	SGH対象生徒:							65%
a	SGH対象生徒以外:	31%	32%	%	%	%	%	%
目標設定の考え方:基礎学力を強化することにより、G30など学力を必要とする大学への進学率を上げる。SGH課題研究により、勉学へのモチベーションを高くする一方、大学入試のあり方そのものも、SGHの課題研究を実施する本校にとって有利になる。SGH課題研究プログラムそのものが、グローバル化された大学を選ぶ生徒の増加を促すに違いない。								
海外大学へ進学する生徒の人数								
	SGH対象生徒:							6人
b	SGH対象生徒以外:	2人	1人	人	人	人	人	人
目標設定の考え方:本校では、様々な進路選択の機会を設けているが、海外大学への進学に関しては積極的なアピールは行ってこなかった。今後は海外大学への進学を支援する体制を組織化し、進学に関する情報提供の機会を増やすと共に、生徒に対しては海外大学に進学した卒業生による海外大学の魅力をアピールしてもらい海外大学への進学が身近なものとなし、生徒保護者には大学へ奨学金制度の創設を働きかけ、経済的ハードルを下げることにより、海外大学進学者の増加を図る。								
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
	SGH対象生徒:							65%
c	SGH対象生徒以外:	-	-	%	%	%	%	%
目標設定の考え方:「核兵器のない世界をつくる女性」に目覚めた生徒は、それぞれの興味・関心のある分野にて核兵器のない世界を目指そうとする。そのため現実には65%という目標値を上回る可能性はある。また、段階的に数値が上昇するのは、進学した卒業生が母校に様々な形で関わる機会が増えることにより、「核兵器のない世界をつくる」ことを目指す生徒が徐々に増加すると考える。								
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
	SGH対象生徒:							100人
d	SGH対象生徒以外:	-	-	人	人	人	人	人
目標設定の考え方:各学年で用意した様々な海外研修プログラムや海外からの留学生などを積極的に受け入れることによって、生徒の海外に対するハードルは低くなっており、海外への留学・研修は身近なものになっている。また、中学・高校在学中の海外研修プログラムを経験することにより、異文化理解・異文化交流は「平和な世界の創造」には必要不可欠なものであるという認識が高まっているため、大学在学中に留学または海外研修に行く卒業生の数は増加していく。ただし、経済的な壁があるため、人数は60人という控えめな数値となっている。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	30人	32人						100人
	目標設定の考え方: 課題研究のため従来行ってきた海外研修の拡充と新設により研修参加者は段階的に増加する。これらの研修に参加した生徒がさらなる自己研鑽を求めたり、研修に参加した生徒に触発され、自主的に海外研修に参加する生徒も増えていくものと考ええる。							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	440人	440人						1300人
	目標設定の考え方: 本校では中学3年生、高校2年生で学年全体で平和について考える研修をすでに行っており、このような研修を全学年に拡大し、すべての生徒が参加できる形をとる。							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	4校	4校						30校
	目標設定の考え方: 中学2年生より各学年において海外研修を拡充、新規創設することにより連携を行う海外大学・高校数は増加する。生徒は「核兵器のない世界をつくる」ことを目指すリーダーとして活動することから、平和の実現のため生徒自身が求め、連携する大学・高校の数は30年度以降も増加し続けていく。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	100人	100人						2000人
	目標設定の考え方: 従来より大学との連携を行っており、卒業生を中心に多くの学生とも平和について考え、行動する機会を数多く設けてきた。さらに課題研究のため、東京医科歯科大学とIGSのディベートフォーラムを活用する。26年度は20名超の大学生がメンターとして参画する。通年にわたり2学年が学生等からの指導を受ける機会を設けることから外部人材が参画する延べ人数は26年度より飛躍的に増大する。大学生の人数は今後40名程度に増える予定である。							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	2人	2人						35人
	目標設定の考え方: 留学アドバイザー、国連職員(本校卒業生)、大使館勤務者など、不定期の指導。本事業のためのアドバイザーからの哲学授業。							
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	5人	5人						500人
	目標設定の考え方: JICA国際協力小論文コンクール、英語関係のコンテスト(スピーチ、ディベート、プレゼンテーション、エッセイ)、サイエンス系のコンテストなどは当該学年において全員参加を原則とする。ただし、校内審査を行い、優秀者を全国レベルに送り込む。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	143人	121人						190人
	目標設定の考え方: 長期(1年間)留学生、短期留学生(1ヶ月以上)、帰国生(2年以上の海外生活体験を持つ生徒)、海外から訪れる中高生および視察団と定義する。帰国生については、必ずしも英語圏ではない。海外から訪れる中高生、視察団に関しては不可抗力の事態(天災、紛争など)により、人数が大幅に変動することがある。平成27年度は被爆70周年に当たる年であり、広島への来訪者そのものが大幅に増えると予測されるため、本校での受入れも増大すると思われる。							
h	先進校としての研究発表回数							
	0回	0回						3回
	目標設定の考え方: 年3回という数字は非常に控えめなものであるが、グローバルリーディング女子校として研究成果の発表は定期的に行う必要がある。また、研究内容を同時に様々な視点より意見を頂く必要から回数を絞り込むことにより、複数の方々が一室に会しやすくなり考えている。一方で回数を絞り込みすぎると、スケジュールの都合上、研究発表の場に臨席できない方も多くなる可能性もあることから年3回という回数設定に至った。							
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	△	△						○
	目標設定の考え方: グローバルリーディング女子校を目指す上では、平和を共創する集団をつくっていくことが重要不可欠である。そのため世界に広く共創する仲間を求め、グローバルリーダーとしての役割を果たす上でホームページは重要な手段であり、その発信のための言語としてグローバル言語である英語によるホームページの整備を急いで進める必要がある。そのホームページも今後は生徒自身が自ら身につけた平和観、対話力を持って発信するページを徐々に拡充していく。平成27年度にすべてのページの整備を目指す。							
j	(その他本構想における取組の具体的指標) TOEFL iBTに取り組む生徒の数							
	0人	11人						1200人
	目標設定の考え方: 2013年度よりTOEFL講座を開講。中3、高1生徒が11人受講している。2014年度より中1と高1の全生徒がe-learningを開始し、次年度より順次2学年ずつ増えていく。							

< 調査の概要について >

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	1,346	1,347					
SGH対象生徒数							
SGH対象外生徒数			0	0	0	0	0